

向日葵の隣で

峰月伴



青空をバックに咲く二輪の向日葵の絵。額に飾られたその絵に、澤木侑太は心を奪われた。ドクンと、脈打つのが分かった。

なんて、存在感がある絵だろう。

たくさん飾られた絵の中で、この向日葵だけが光を放っているようだった。周りの絵は、霞んで見えた。

額縁の下に名前があるのに気が付いたのは、絵に見とれ尽くした後だった。

「AKARIKANZAKI.....」

名前に聞き覚えがあった。神崎明。同じ二年で隣のクラスの子だった。

「あいつ、美術部だったのか」

隣のクラスの事なんて、興味はなかった。ただ、合同で体育をするから存在は知っていた。華奢で男なのに綺麗な顔をしていると、クラスの女子が騒いでいたような気がする。侑太は消えかけた記憶を思い出した。

まさか、自分が絵に感動するなんて思いもしなかった。

それが、神崎明に興味を抱いたきっかけだった。

絵画展を堪能した——といっても明の絵しかまともに見なかったが——侑太は部活に入る為、部室に足を向けた。特に やりたいわけではなかったが、中学でもやっていた陸上を続けた。

かったりいなあ。

根が真面目だったら毎日出て、タイムを縮めようと足掻くのが当たり前だろうが、高校に入ってからタイムは落ちた。周りとの差は開くばかりだった。そんなだから侑太はもともとなかったやる気が、どんどんなくなった。

めんどくさ。いいや、サボろーっと。

部室に向かっていた足取りを、ぐるりと方向転換して下駄箱に向かった。

もう辞めようかなあ。その方がすっきりするし.....。

ポケットから携帯を取り出してメール画面を開いた。つるんでいる仲間の名前を呼び出して『暇だから遊ぼうぜ』と打ち込んだ。

メール画面しか見ていなかった侑太は、前から歩いて来た人に気が付かずに肩がぶつかり、その拍子で携帯が掌から転がり落ちた。

「あ！ やべっ」

ゴトンと、鈍い音を立てて廊下に落ちた携帯を白い手が拾い上げた。

「ごめん！ 携帯、大丈夫かな？」

慌てて侑太に返した白い手の持ち主は、神崎明だった。

「あー……、うん。大丈夫、ほら」

おろおろしている明に、侑太は携帯の画面を見せた。それを見て、明はほっと息を吐き安心した。

間近で見る明は、整った顔をしていた。二重の瞼に、長いまつ毛。そして、日焼けをしていない白い肌。キレイだな、と改めて侑太は思った。そして、これは確かに女子に人気だ。と、確信した。

「お前って、キレイな顔してんな」

「え？」

「あ……、悪い。その、今、そう思っただけだから」

思った事が、いつの間にか言葉になっていた。自分でも驚き、それを聞いた明も困惑しているのが分かった。

「な、何でもねえよ！ そうゆう風に、女子が騒いでたからさ」

慌てる侑太を見て、明が堪えきれずに嘔き出した。

「そんなに慌てる事ないよ。そうゆうの慣れてるからさ」

声を立てて笑う明を見て、怒ってなくてよかったと思った。そして、そんな風に笑う明が何だか可愛く見えた。

「そう。なら、よかった」

「あー、笑った！ 久々に爆笑したよ。澤木くんって、面白い人なんだね」

名前を呼ばれて、何だか心臓が跳ねた。

「……どんなやつだと思ってたんだよ？」

「う～ん。慣れてるって感じ？」

「は？ 何だそれ……？」

どう受け取っていいか分からず考え込んでいたら、くすりと明が笑った。

「女子に人気なのは澤木くんの方だよ」

「え？」

廊下の真ん中で突っ立っていた侑太を、明は壁側に誘導した。そして、侑太の背中を壁に押し当てた。

「背が高く、格好良くて。陸上で鍛えた身体はたくましくて……。誰でも分け隔てなく接してくれて。そんなの、モテるに決まってるでしょ？」

「……そんな事、面と言われても」

侑太より身長の高い明の顔が間近に迫り、その身体が密着してきた。触れた身体の体温が、制服を通して伝わってきた。その温かな体温に、侑太の身体は脈打った。

「神崎……、何？ どうしたんだよ」

心臓がドクンドクンと早い。それを聞かれてしまうんじゃないかと思い、侑太は身体に触れている明を引き離そうと肩に手を掛けた。その触れた肩が、思いの外細くて手を離してしまった。

「もっと触れてよ」

優雅な曲線を描いた瞳が、侑太を見上げた。その熱い視線に、身体の芯が一気に熱を帯びた。

「神崎……」

「僕は、ずっと澤木くんの事見てたんだ。でも、見てるしか出来なくて。ずっと喋りたいと思ってたんだ。気が付かなかったでしょ？」

秘密を打ち明けた明の頬が、ほんのりと紅く染まった。その頬に触れたくなった侑太は、手を伸ばした。

「頬、紅くなってるぞ」

「澤木くん、分かってやってる？」

「何が？」

「今、告白してるんだからね！ 頬くらい紅くなるよ……」

頬に触れた掌から逃れるように、明は顔を横に背けた。

「……あの絵、キレイだったよ」

「え……？」

一度外した視線を、明はもう一度戻した。

「絵画展の向日葵の絵だよ。あれ、神崎が描いたんだろ？」

「見て、くれてたの？」

「何でかな。あの向日葵の絵以外見えなかった。他のが、霞んで見えただ」

そう言うと、明は大きな瞳をさらに大きく見開いた。

「僕の事なんて、見てくれてないと思ってた……」

潤んだ瞳で見上げる明は、その辺の女子より魅力的に見えた。

「お前、可愛いな……」

今思えば、あの向日葵の絵に魅せられていた。それを描いた神崎明という存在に、もう触れていた。

侑太を見上げている明の、薄紅色のふっくらとした唇が堪らなく欲しくなった。

誰もいない廊下で、侑太は色付く明の唇に触れた。そして、唇を寄せた。

甘く、切ない香りがした。